

保育への視座(2)

——若い保育者の方々へ——

河邊 杲

私が研修に参加した幼稚園から先生方の保育実践についてコメントが欲しいと記録が送られて来て、その中のI先生の記録に次のようなことが述べられていました。

「きょう『おしゃべりきのこ』の歌をうたっているとき、M君が部屋の真中で私に背をむけて、じつとうずくまっていた。私はまたふざけていると思ったが、何となく待てよと

思い、M君の方をじつと見てにこにこしていた。歌い終わってM君と目が合い私が叱らずじつと見ていると、M君はにこっと笑って『ほくきのこ』と。あっそうだったのかと内心うろたえましたが、『そう、きのこになって歌っていたの』と聴きかえすと、『うん、きのこになって皆に歌ってもらっていたの』……。この時待っていないかったらきつと『座

りなさい』と目をけわしくして言っ
てしま
い、M君の「ぎのこになりた
い」心持
ちとか、そのあとのうれし
そうな顔とか、何とも
言えないその場の雰囲気
とかに気づかず終
わったであらう。それど
ころかM君には悲しい
気持ちを与え、他の子
どもたちにも気まず
い思いにさせたことであ
らう。ある講演会で
聞いた『十五秒待つて下
さい』というこ
とば
を思い出して、いままで
私も十五秒待つてい
るつもりでいましたが、『
待つ』とい
つても
その時の待つ十五秒は
子どもにとつては執行
猶予のような十五秒だ
った気がする。また自
分自身に与えられた十
五秒は、いつ言おうか
といらいらする十五秒
であったような気がす
る。『待つ保育』と言
つても保育者にとつて
の待つのでは子どもを
追いつめる結果にな
りかねない。その子ど
もにとつての十五秒を
待つてあげられなければ
と感じました。

M君はIQが120以上もあ
り、じつくり考
える力も、一つのことに
集中する能力も、説明
を聞いて理解する能力
も持ち併せている上
に
独創的なところがある
というこ
とを知
つて
いても、その時その場
でのM君自身の心持
ちの
動きに
触れよ
うとし
ていな
いから
困った
行動を
またし
ている
としか
私の目
に映ら
なかつ
たの
だと考
えさせ
られま
した。

もつともM君の『いま、
ここ』の心
に真に
ふれ感
じとる
よくな
れば、
M君な
らでは
の
発想に
気づき
共感で
きたで
あらう
と思っ
てい
ます。
私の中
にある
、皆と
足並を
揃えて
活動
ができ
れば」と
いうこ
とをそ
れぞれ
がしだ
す
前に、
もつと
M君自
身の要
求や発
想をた
のし
んでも
らわな
ければ
とも思
うよう
になり
まし
た。」と。
(傍点
は筆者)

I 先生流の「待つ保育観」を御自分の保育

体験から、しみじみと述べられていて、保育実践に即した省察の数々からいろいろな大事なことを学ぶことができます。

まず、待つ保育については随分以前からいろいろな人が唱えられて来っていますが、あちこちで誤解されているのに気づかせられて来て、この用語を用いるときまたこのことを聴くとき、充分心しなければならぬように思っています。

それは「待つ」保育の本質が充分伝えられていなかったり理解できていないからのように思います。I先生の記録にもあるように、簡潔で、よくわかり易いことばとして、保育の見直しなどに用いられています。が、ややもすると短絡的にこれを単なる保育の方法・技術のように理解されてしまい易いことです。本来、子どもの主体性や自発性に培う保育をするには、もっと幼児自身に任せていいので

はないかとか、幼児の成長発達をよく見るとその育つ過程に時間をかけねばならないというところから説かれている場合が多いように思います。また教育一般について目的や目標を具体化していく過程でつとめて計画的・効果的・能率的に、ということが説かれたことから対象となる子どもを充分理解せず教導等による教化一辺倒に偏重したことへの警告としても、待つ教育（保育）が説かれて来たことも事実です。

然し私はどのような立場で説かれるにせよ保育においては保育の本質である、幼児の成長しようとする力や心を信頼することがその前提になっていないと、待つ心の意味が誤解されてしまうことを危惧しています。このことをこの記録でもう少し具体的に考えて見ましょう。

I先生の述べられている実践記録の中で私

たちがまず見逃してはならないのは、M君との関係について、その時その場で、自覚されたままがあるがままに詳述されていることです。

それはM君に対しての理解について「またふざけている」と自分のものさしではかるような断定的な見方をされてはいるが、その次の瞬間、常日頃のような、すぐ注意をするというのとは違って、じっと見てにこにこされていることである。そしてみんなと楽しく歌うことに終始されているところに注目したい。(日常的には「ふざけている」と見えたところ、で保育者はそれにもとづいて助言なり指導をする場合が多い。)

また「ふざけている」という行動をくりかえしているように見えても、その表現の意味内容はひとつひとつ違っているのかも知れないということにあとで気づかれたことにも注目

したい。

つまり「いま・ここ」におけるM君の心の動きにもっと添うようになれば、ひょっとしてまた違った発想による表現も見えてくるのではないかと述べられていることとわかる。

M君に即いて「いま・ここ」の心に添えなれているために、またいつもと同じ困ったことをやっているとしたか目に映らなかつたのでしょう。ここは極めて重要なところで、I先生がM君との関係の中で何か常日頃と違ったものを感じられて、ただじっと見つめにこにこされたように思われます。それは無意識的な動きのようでもあり、何時もと微妙に違い、ここは自分でもなかなか気付けないところかも知れません。「ひょっとして……」というM君への思いの広がりのようなもの(これが信頼感につながるものかも知れない)、つまりここにI先生のM君との感情的なつな

がりを感じます。

しかも、どうしようかという何時も抱かれています。いらいらではなく、にこにこさかかいてそこには安心感も感じられます。またこの瞬間のような動きではあるが、I先生の瞳に柔かなにか暖かいものを感じることもできます。

それは決して放任ではない。しっかりと見つめられている。その行為の意味は不明でも、ただただM君の存在を確認されている。I先生の姿が見えます。そして瞳と瞳が合ったときにこつと笑った両者の関係に、確かな交わりが生じ両者はきつと安らぎに似たものを感じられたにちがいないと思われまふ。この一連の動きの中でI先生は自分自身の感情の動きにはつきり目覚められているようです。

まだ全面的にM君の時その場の心に添えないで行為を肯定的に受け容れられないで

いる自分をまず受け容れようと思われているのが実によく伝わって来ます。そのことによりM君が「ぼくきのこ」と自己をすなおに表現したり、I先生が「ぼくきのこ」になって歌っていたの」と彼の表明を受けとめ確かめられることよって、「ぼくきのこ」になって皆に歌ってもらっていたの」と、集団の中で皆に支えられていたひとときの喜びを実感し表現してくれたのだと思えます。

こうした両者の関係のところ、まさにゼニユウィン (genuine) 純粹であり一如といえる姿に近い姿といえるでしょう。

この保育者があるのままの自己に目覚められて、相手がよりよく活きる事ができる時の姿を「待つ姿勢」と言ってもよいように私は思えます。

こうした心のゆらぎをもちつつ、それに目覚めて、M君の時その場の心に添うよう

